

碎石嶺路を塞ぎ、足柄の官道は廢れて初めて箱根の新路が開かれた。平安朝になつてからの箱根山は、どんな工合に騷人の詞藻に入つて居るか。

相模

大江公資の妻相模は小倉百人一首に戀歌を以て有名なる平安朝女歌人の一人である。公資が相模守となつて任に赴いた時に相模も亦夫に隨ふて此國に下向した。其の箱根權現に奉りし百首の中、雜五首の一角

明暮の心にかけて箱根山ふたとせみとせいでぞたちぬる

といふのである。此の權現奉納百首の返歌なりとて或僧の許より送りし百首の中、同じく雜五首の一角

箱根山あけ暮いそきこし道のまゐるしはかりはありとしらなん

とあつたので、相模これに答へて

ふたつなき心にいれて箱根山祈る我身を空しからすな（以上相模集）

大江匡房

といふを又百首の中に收めて送つた。

大江匡房は學和漢を兼ね、所謂三房の一人として、或は江帥の名を以て、或は江家次第の著者として平安朝の文學を飾る江家の碩學である。詩文に長じ、和歌に巧なるは人の知る所。其の箱根山を詠ぜし

箱根山薄紫の坪すみれふたしほみしほ誰か染けん（堀河百首）

の一首は今時の女學生に讀ませばハイカラとや評せんか。

源俊賴

源俊賴は金葉和歌集の撰者、堀河・鳥羽・崇徳の三朝に仕へ、朝廷及び諸家の歌合にはいつも判者に推さる。源顯仲も亦當時の歌才である。俊賴の金葉集に満足が出来ず、良玉集を著はして向を張らんと試みた。俊賴の箱根の歌は

詠めやる箱根の山を誰爲に明れば雪の降ちほふらん（散木集）

といふのである。顯仲のは

文學

散ざじと置らんものを箱根山明ればこぼる玉笹の露 (堀河百首)  
である。雪と氷の差はあれど、観察の點が、どこやら似通ふ所がある様に思はれる。

藤原忠通

法性寺入道關白藤原忠通は保元の亂の發頭人惡左府頼長の兄で、朝廷の實權を握つた最後の藤原氏の人といふてよろしい、

明るまで箱根の山にねらへとも鹿の立所そともしかりける

(夫木集)

橘俊綱

同じく此山の狩倉を歌ふたのは橘俊綱のそれである。

照射して箱根の山に明にけりふたよりみよりあふとせしまに

(千載集)

鎌倉時代

鎌倉時代に入つてからは、さすがに武家の中心が東國に起り、京鎌倉の往來引きもさらず、和歌の名匠また儼然として東西に起つたので、箱根

四行

山が其吟詠に入つたのは枚擧に遑ない位である。

鎌倉初世の三奇法師の一人西行が、一笠一篋、身を雲水に托して東西の風物、其心の琴線に觸るゝもの悉く金玉とならぬはない、箱根山を越るときこの歌は

箱根山梢もまたや冬ならんふたみは松の雪のむら消 (夫木集)

源實朝

將軍實朝、一代の詩才を武辨に調和させて、雄心落々、東海雄大の風景常に其藻詞に來往して止まない、いかでかこの箱根を吟ぜざらん、金槐和歌集に「箱根の山を打出て見れば波のよる小島あり、供の者に此浦の名は知やと尋しかば、伊豆の海となん申と答へ侍りしを聞て」との小序を載せて、さて

箱根路を我越くれは伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

(續後撰集)

如何にも實況を描き出してまた餘蘊なしといひたい、此山路を通るもの、また誰か此感なからん、然も實朝一流の勇健の歌調に載せられて、雄大の風景を眼前に見る心地がする。

實朝又二所參詣の途次、蘆湖を眺めての詠歌がある

玉くしけ箱根の海はけくれあれや、ふた山かけて何かたゆたふ

(金地集)

寂蓮と顯昭

寂蓮法師は藤原俊成の姪で、俊成に養はれて子となつた。定家が生れなかつたなら、當然御子左家を繼ぐのであつたが、定家のために避けて佛門に入つたのである。和歌は御手いもつて又丹生にも長じて居る。寂蓮の競手に僧顯昭といふのがある。顯昭は學識優博なるも才思少しく及ばざる所がある。寂蓮は文學はないけれども、特に妙に造る才能を持つて居る。顯昭嘗て「和歌は藝の内でも至難のものではない、寂蓮すら學ば

なして歌を巧に作るではないか」といへば、寂蓮も負けては居ない。「此の世に最も、なし難いものは和歌に過ぐるものはあるまい、顯昭の様な博學でもまだ「甘く出来ないではないか」といつたので顯昭一言もなかつたとの事である。寂蓮が嘗て關東下向の道にこの箱根山中を通つて詠じた歌は其家集に入つて居る。

十月ばかりに東の方にまかりけるに、管根と云山をなん越ける、  
所の有様怪しく尋常に變りけり、遙に峯に登りては海を渡り、谷  
に下りては雨を躡じ、去程に風に木の葉をまくり揚て、時雨の麓  
より上りければ

旅の空雲踏みみねを越行ん時雨は袖の下よりそふる (家集)

顯昭のこの山を詠ぜしは

吾妹子か箱根の山の糸櫻結び置たる花かとぞみる (夫木集)

藤原道家

光明寺入道は鎌倉將軍頼經の父として藤原道家の名は京鎌倉の軋轢史に最も關係が深い。

旅衣日も夕かけて足柄の箱根飛び越雁を鳴なる (夫木集)

藤原爲家

鎌倉時代に和歌の實權を一家に掌握せし御子左家の名匠定家の子爲家は續古今集の撰者として、又七玉集の作者の一人として名聲一代を歴した。

其の詠藻に入りたる箱根は如何に。 (夫木集)

箱根山麓の里に宿とへは暮ぬといそく嶺の旅人 (同上)

玉くしけ箱根の山の明方に友よひかはす岩の陰道 (同上)

女の身のはるくといざよふ月に誘はれて慣れぬ旅路にさまよひ出て、都から鎌倉まで子を思ふ心の關にたどりついた阿佛尼は御子左爲家の後妻である。道のため、家のため、東の龜の鑑にうつしてくもらぬ影をあらはさんとの意氣込に箱根の山も物かは、

阿佛尼

尋ねきてわがこえかゝるはこねぢを山のかひあるまるへと思ふ

廿八日いつのこふをいで箱根路にかゝる、いまだ夜深かりけれ

ば、

玉くしけ箱根の山をいそげども猶明がたき横雲の空

あしがら山はみちとをしとて、はこねぢにかゝるなりけり、

ゆかしさよそなたの雲をそばだてよそになしぬるあしがらの山

いとさかしき山を下る、人のあしもとどまりがたし、湯坂とぞ云

ふなる、からうじてこえはてたれば、又麓にはや川といふ川あり、

まことに早し、木のおほく流るゝをいかにとへば、あまのもし

ほ木を浦へいだしむとて流すなりといふ、

東路の湯坂を越てみわたせば、ほ木流るゝ早川の水 (十六夜日記)

又夫木集にも阿佛尼の箱根の歌が載つて居る。

箱根路や山風そよくさ竹のまのに亂れて霞降らし (夫木集)  
法眼慶融が詠んだ歌

王くしげ箱根の山の峰深く水海晴て澄る月影 (夫木集)

は山上蘆湖の風景を吟じたのである。

仁治三年前河内守源親行の鎌倉下向に、又この湖邊を過ぎて詠じた和歌は、其の東關紀行に見えて居る。

かぎりある道なれば、この砌をも立出て猶ゆきすぎるほどに管根の山にもつきにけり、岩がね高く重りて、駒もなつむばかり也、山のなかに至りて水うみ廣くたゞへり、箱根の湖となづく、又蘆の海といふもあり、権現垂跡のもとゝ氣高く尊し、朱樓紫殿の雲に重れる粧ひ、唐家驪山宮かと驚かれ、巖室石籠の波にのぞめる影、錢塘の水心寺ともいひつべし、うれしき便なれば、うき身の

法融

源親行

行衛しるべさせ給へなど祈りて、法施奉るついでに

今よりは思ひ亂し蘆の海の深さめくみを神にまかせて

此山もこえありて、湯本と云所にとまりたれば、大山おろし烈しく打まぐれて谷川漲りまさり、岩瀬の波高くむせぶ、暢臥房のよるのさくにも過たり、かの源氏物がたりの歌に涙もよほす瀧のをとかなといへる思ひよられてあはれなり、

夫ならぬたのみはなさを古郷の夢路ゆるさぬ瀧の音哉 (以上東關紀行)

衣笠内大臣家良の詠んだ箱根の歌は

置く霜に枯にけらしな足柄の箱根のねろに茂るにこ草 (新撰六帖)

鎌倉の將軍宗尊親王の詠まれたのは

柞ちる箱根の山に吹く風は紅葉をまける心ちこそすれ (夫木集)

箱根山麓の野邊の女郎花たかまくあはの色にさくらん (同上)

藤原家良

宗尊親王

箱根の山の月を詠んだのは讀人不知として

秋の夜の月の光りし清ければ箱根の山のうちさへそてる(今古六帖)  
又雪を吟ぜしは後村上天皇の御製として

後村上天皇

我末のよゝに忘るな足柄や箱根の雪を分し心を (新築集)

又郭公を詠ぜしは同じく讀人不知として

明ぬまに箱根の山の郭公二聲とたに鳴渡るらん (夫木集)

などいふのがある。

室町時代

室町時代に至りては諸家の紀行に此の山路の詠はれたものが却々少なくなす。

宗久

まづ觀應の頃宗久の、まらぬひの筑紫を出て、京都のあたりにさすらひて東國に赴いた、其の「都のつと」に

それより浮島が原を過、箱根にまうづ、げに權現のあらたなる御

誓ならずば、此山のいたゞきにかゝる水あるべしとも覺えず、いとふしぎ也、此所をばこの世ながらのめいどなりと申つたへたるにや、所のさまもなべてには變りたることゝも多かりし、いつとなく波かぜあれて、いとすさまじくみゆ。

箱根路や水海ある、山風に明やらぬよのうさぞまらるゝ

(都のつと)

太田道灌

太田道灌の平安紀行は近頃他人の僞作との考證はあるも、兎に角箱根通過の一節は見えて居る。

箱根の山によぢ上るに、從兵にひやし酒のませ、水粉みづからも喰してなん、心をやる事しばし計なり、

箱根山あくる雲の郭公みちさまたけの一聲もうし (以上平安紀行)

道興准后

聖護院准后道興の廻國雜記には

文 學

小田原に着侍れば早川の浦とて水上は大河にて海邊につゞきたるによりてかやうに申侍るとなむ

末とをく流出たるはや川のうちや千尋の波路成らん

一夜此所に留りて旅泊の愁緒かへりてその興も多かりけり、夜もすがらまどろまん隙も侍らざりければ

あしのやは波を枕にしきたへの床には夢のたちもかへらて

これより箱根三島などへ參詣せんとして風祭の里といへる所にて渡し舟さしよせけるとき、

舟出せむみなと江ちかき里の名もげに白波のかさまつり哉

箱根山に行かれて、今夜は社參に及ばず、翌朝まうて、落葉を見

て  
こがらしの錦をたゝむ箱根山あけて見るにぞもみち成ける

嵐ふくをのへの紅葉散みたれ錦をたゝむ箱根山かな (以上廻國雜記)

宗祇法師は天下第一の連歌の名匠。花下の勅號を賜はり、又勅を奉じて

筑波集を撰す、其著吾妻問答や、筑紫道記は斯道の指針として連歌界に重ぜられて居る。文龜二年七月箱根湯本の逆旅に永眠して、歌魂長へに此風景に聯想を興へる。其の著名所方角抄に蘆湖の事が見えて居る。

箱根山の頭に水海あり、言語道斷及がたき地景なり、湖水北南へ五十町、東西は近し、東の汀に坊々有之、其上権現社壇御座なり、西向なり、湖の南の汀に蘆川の宿とて百家許あり、此湖に富士の影移て西に見えたり、眺望無雙の地なり (名所方角抄)

宗祇も亦名ある連歌師である、天文十四年東國遊行の際、暫らく小田原に寓居して、北條幻庵と交はつた。二月の或曉山中の雪景を見て歌ふた。

二月二十六日幻庵より朝風呂に入べき由使あり、過し夜の雨、曉

方より冴かへりてや有けん起出て見れば箱根つゞきの峯々雪いと  
しろく降り、驚かされて

(東國紀行)

箱根山霞こめたる曙方の春に驚く峯の白雪

細川幽齋

細川幽齋は古今の傳授を受けたる唯一の生存者として戰國の末葉學問地  
を拂ふて去つた危急の時に際し、文學を擁護した功は多大なるものがあ  
る。天正小田原の役に玄旨河邊の陣所にあつて早川の和歌を詠じた。

水無月晦日御被する日と人々申せしかば、早川陣取の山の麓なり、  
名寄に名所のよしあり、

(東國陣道記)

みそさせし袖こそぬるれちひの浪うつる月日も早川の瀬に

徳川時代

徳川時代となつてからの箱根は更に一層の面目を新にして居る。まづ大  
路を此山中に開きて箱根宿を置いたのが元和四年である。新關の設けら

徳川家光

れたも、大抵此頃の事であらう。元和に偃武し、世は太平に向ひ、文教  
時に勃興して漢文の隆盛を來した。されば箱根山の文學に上るものも和  
歌は頓に減じて殆んど漢詩と變じた。寛永十一年六月將軍家光が上洛の  
際、此山にて詠じた和歌が、多分此山に關する主なる和歌の終のもので  
はあるまいか。

寛永十一年甲戌年水無月の中の十日に江府の柳營を出御成せ給ひ

廿四日箱根山を過させ給ふとて

越へ侘る道もさかしき箱根山あといつしか遠かり行く

(柳營上洛記)

箱根の詩

さて漢詩に至つては羅山以下林家代々の學者の詠じたものを初として此  
時代を通じての學者の作は、兎ても枚舉に遑あらぬ次第である。今は其  
の主なるものを擧げて一斑を示すことしよう。



箱根

林 羅山

長坂脩途不可攀，惟天設險甲東關。回頭本末待吾僕，  
信足湖邊濯客顏。鯨背浪高伊豆島，馬蹄雲起管根山。  
相逢盡道歸耕事，歲々年年幾往還。

箱根山

林 春齋

坂行八里苦攀援，東去西來欲斷魂。名與山靈堅且从，  
白雲鎖管石爲根。

同

林 讀耕

本是東關險，箱根深且幽。雲高天闕逼，湖霽水煙收。  
一道鳥張翅，千巖猿掉頭。王陽今若在，九折定歎愁。

同

山崎 闇齋

過來布士野，攀上箱根嶺。湖面水皮皺，坂頭地骨高。

往還呈掌節，要害帶腰刀。關戍不曾懈，鷄鳴誰得逃。

越箱根山十首

同

鷄聲催出小田原，踏破曉雲登管根。四望蕭條天地窄，  
翠微條見揭晨暾。箱根山裡路嵯峨，黃落秋風感慨多。  
澗底松兮嶺頭栢，歲寒心事不相訛。

阪頭風冷氣尤清，山腹瀑流眼益明。唯有雨師聯水箔，  
更無雲客濯塵纓。行到箱根最上層，一天雲霧氣澄々。  
剛風吹去富山雪，瓊影入雲碎復凝。陰晴屢變箱根山，  
當午天開風亦閑。富嶽倒涵湖水底，白雲吐雪玉團々。

聊吟蘆海憩茶亭 山色水光人眼青 富嶽忽看群嶺外  
 白雲堆上雪瓏玲 宜有神龍湧潛藏 萬卷上人誦了俗  
 雲山千轉湛湖光 國分木繁九頭王 峭壁巖峰神所刪  
 不盡乾坤在此間 竹笠芒鞋葛布幘 自嘗險阻慰僮僕  
 山路莫言石齒足 臨雲蒙霧又乘風 行盡箱根八里中  
 無限客愁何日散 驛程此去更重々

西除函關

服部元喬

神州開大略 靈嶽道西關 峯頂郊雲外 天門驛樹間

湖分銀漢水 崖浸玉函山 征馬蹴巖裂 行人鑿空攀  
 誰何嚴詰盜 罔兩避知姦 日閱棄繻入 時看褊載還  
 王侯因設險 客子不為艱 既過長轡盡 回頭破旅顏

遊玉笥山六首

同

玉笥山東溪谷分 仙羊化石路成群 迷蹤漸寤黃初起  
 壯志聊酬宗少文 停履雷轟巖下電 拂衣烟亂嶺頭雲  
 已驚投宿多村落 且喜尋源洗世氛 傳言此地勝驪山  
 靈液殊開大嶽間 一自始分神女澤 至今長駐里人顏  
 注來不盡疑香漢 浴罷何妨共玉環 肌骨并除塵垢事  
 便應輕舉踏雲還 人家鳥道極崑崙 處々躋攀試步四  
 九折溪流東澤水 千尋樹抄太平臺 海天龍氣蒸遙起  
 嶽裏雲根雨忽來

歸舍解衣堪避暑，山中更有濁醪杯。  
峭壁巖峯陟近隣，摧林蹴石道愈新。  
捫蘿自怪驅山鬼，叩牝誰知養谷神。  
但恐始寧門下客，復驚臨海郡中人。  
謝家已是多狂態，曲蓋相携遺此身。  
宮下堂洲草木鮮，樓臺幾處擁溫泉。  
丘中已遇鳴琴客，溪上何來采藥仙。  
隱霧斑毛窺豹穴，投珠明月墜龍淵。  
翔遊總是人間外，不怪名山有洞天。  
西風昨夜復驚秋，地限關門不可留。  
非有真人揚紫氣，何嫌我輩跨青牛。  
雙生色夾峯雲送，孤照天懸嶽日收。  
回首慇懃烟靄裏，山靈亦似待重遊。

重遊玉笥山二首

服部元喬

濟勝愜情輕此身，分雲始覺步虛新。  
五丁鑿道誰開蜀，

幾世留家似避秦，傳響歌呼幽谷鳥。  
遊方共遇武陵人，山中雞犬看相熟。  
重到無勞迷問津，再試深山一日情。  
溫泉東澤自分明，當年聒聽鳴流響。  
半夜仍疑驟雨聲，玉笥峯懸仙路近。  
白雲天傍嶽根生，垢氛洗盡唯高枕。  
夢裡還應鼻上清。

過管根山二首

笠顯常

管根六十里，一似蜀山難。  
石路崎嶇轉，谷風蕭瑟寒。  
平湖開絕頂，長坂下哀湍。  
爲道開門吏，莫勞紫氣看。  
山椒十里湛蘆湖，五月風寒欲透膚。  
四擁千峯蒼翠合，時聞雲裡杜鵑聲。

自小田原入管根

同

肩輿續殘夢，忽覺聽飛湍。  
四面峰影攢，兩衫嵐氣寒。

攀巖挂行李，躡峻遊征鞍。丹錦霜餘樹，殷勤與我看。

宿管根山

竺顯常

一路峰巒欲夕陽，長松荒樹入穹蒼。關頭不辨誰人紫，  
坂上無端我馬黃。四壁風生雲臥冷，千巖月出旅魂長。  
鷄鳴却恨過門早，與在蘆湖十里傍。

過管根逢雪宿山上驛至夕天晴寒薄雪亦半消驛亭  
面蘆湖萬頃瀲灩岡巒抱之而富士出其背峻嶒玉立  
正爾與寒月爭輝殆非人境蓋東來一勝狀也乃賦三

律

同

重疊蒼山道，征車入半空。登々逾積雪，步々更寒風。  
群玉衆山合，藍珠千樹同。蘆湖多勝槩，喜在一亭中。  
絕頂初晴處，開軒不太寒。雪殘岡勢靜，月滿水容寬。

銀漢低相接，瑤池宛可觀。更憐栖宿鳥，深夜叫雲端。  
芙蓉萬尋色，到此最堪憐。削雪出山後，跨湖來檻前。  
居然塵表物，恰爾月華天。明發關門度，休將紫氣傳。

函關

菊池禎

玉函山色儻天涯，行過關門紫氣斜。湖浸芙蓉千古雪，  
峰分閻闔萬尋霞。猶龍無復真人度，叱馭空看壯士誇。  
未擬瀾陵裘褐隱，五噫高唱却還車。

曉發函嶺

同

晨裝發嶺上，十里踰嵒嶮。日出青霞起，高樹碧鷄鳴。  
漸度函關去，尚循蘆湖行。松杉含宿霧，澄景浸空明。  
靈鎖神如在，巋然麗丹楹。訪問前代遺，援筆且題名。  
題罷下山登，澗壑變陰晴。曷々雲生岫，祈々送雨聲。

文學

箱根

三六

襪休山店、躊躇去程、陟陽遙瞻望、天未指江城、  
雖耽海岳勝、未離魏闕情、況無魚雁信、鄉淚潛沾纓、

宿函嶺二首

菊池 禎

函山幾里程、一夜憑雲宿、床下暗孤燈、擁爐然苦竹、

其二

關樹懸秋月、湖村帶夜烟、忽驚山氣冷、旅服欲裝綿、

函關聞子規

釋 敬 雄

關門高倚玉笏岑、古木長藤青鬪深、遠客從來爭日月、  
子規何用促歸心、

曉躡箱根關

山梨 治 憲

千折凌雲澗道長、山巔湖色靜泱泱、波連天漢三州裂、  
雲抱芙蓉八葉藏、馬蹟苔深春磴暗、雞聲月落曙烟蒼、

卽今自笑真人似、關門凝紫曉霞揚、

過函關

奧田 士 元

玉笏驚天險、崔嵬雨色哀、高雲嶺下度、大水山頭開、  
鄉國三千里、東西十五回、芙蓉現半面、更倚太平臺、

箱根山

聯合命游學洛陽  
紀行五十首內

太田 林 菴

山勢崿巖仰面看、攀緣峭壁上雲端、岫松倒掛谷千仞、  
朝霧新晴日一竿、阪路羊腸尤凸凹、石高馬足正辛酸、  
更將何地論茲險、蔑視青蓮蜀道難、

箱根山

菊地 東 勻

屈曲盤紆八里餘、虬龍虎豹相紛拏、欲躋幾度仰天歎、  
更比人情平地如、

管根關

同

文 學

三七

管根關聳白雲中，鑿破層巖鳥道通。鷄客不逃識察下，咽喉控斷限西東。

函關

山縣孝孺

關門百里倚龍嵒，十二東秦車轍通。天色幾餘黃霧外，人家半住白雲中。湖分銀漢星辰湛，峰並芙蓉冰雪同。一自終軍棄繯人，于今士氣此間雄。

同

柴野栗山

豈謂長纓繫越才，童心思意棄繯來。龍鍾衰朽君休笑，亦此主恩賜傳回。

湖水

同

十里青山頂，平湖在半空。晴光接河漢，倒影涵芙蓉。常看双飛鶴，恐藏獨角龍。幾回來旅館，俯檻照心胸。

自管根望富士

木下貞幹

自上管根大，更知富士尊。重憂摧地軸，高恠突天門。嵐氣青貌奮，雪容白鳳鶩。衆山回首見，碌々等雞豚。

箱根湖水中見不二山影

安藤守徑

日夕逢君幾驛程，箱根嶺上暫留行。湖中倒見孱顏映，不二却如有二名。

宿玉筍山曉望富士峯

伊藤一元

玉峯臨碧湖，峯影動波上。水晶與琉璃，不曾勞俯仰。

箱根山

寺田臨川

八里函根路，石高泥僕僮。千巖常帶雨，萬壑自生風。湖水泛芙蓉，關門撐紫宮。豆相疆界按，輿馬往來通。昔聽英雄戰，今觀民庶豐。湖泉流不盡，滔々感何窮。

文

明治維新

木戸松菊

王政維れ新まり、明治の聖世に入りてからの箱根の愛者には松菊木戸公を第一に擧げなければならぬ。公は實に新箱根の開發者といふてもよからう。七湯の中でも最も木賀を愛せられ、公暇あるごとにこゝに遊ばれた。其の病を得られてからは、木賀は其靜養の地となつて、龜屋の樓上に訪客を謝絶して得意の吟詠を恣にせられて居つた。今其主なるものを紹介して見よう

己巳秋、謝官養病于箱根温泉、偶值中秋、與同行謀賞

月湖上、雨不果、因有此作

白水青山對月明、醉吟聊欲慰愁情、風流亦自多蹉跌、

湖上却聞風雨聲

與友人越函嶺次韻

此氣養來天壤間、不嫌世路險於山、短衣孤劍高秋夕、

烟霧滿湖過故關

對江山

予が家はもと公と烟戚の關係があつた、公の病を箱根に養はれたとき予が亡父もこれに隨ひ木賀の客舎にあつた。公、一日山靈の氣に打たれて爽快を感じ、一生を江山に託して忽ち長篇をものせられた、題して「對江山」といふ。高樓筆を奔らせて龍虎躍るの概があつた、亡父請ひ受けて家に藏した、今傳つて予の手に在り。卷頭に掲ぐる寫眞は即ちこれである。

對江山

千里江山落眼中、眼中江山即千里、山自幽靜水自清、  
日々相對我心喜、天地妙美人不知、人不知處有妙美、  
大道可行又何妨、聖賢所到無定止、人間有氣元浩然、  
終年不語生與死、君子如愚小人智、一時名利不足恃、

文學

專此天真誰得禁、可憐世情如片紙、分明眼中判是非、  
欲託生涯江山是、

木賀客中與青浦賦

老樹圍門常不局、一痕山月透籬青、問人樂事人知否、  
夜々露流帶夢聽、

木賀客舍

清流廻戶外、四壁總青山、聽水思琴瑟、看雲忘世間、

丙子九月六日游木賀溫泉東海山內先生曾來此、使  
畫工寬畝寫真景、自題詩于其上、醉墨淋漓、足想當時  
清游因次其韻、以寓懷舊之意、嗚呼先生去世、已閱五  
裘葛不能無人生如夢之歎也、

東海先生安在哉、雲烟鎖跡不歸來、樓前風景依然好、

獨倚欄干懶舉杯

蘆湯途上次某韻

潺湲溪水觸巖摧、秋草花間一徑開、禽語蕭然人不見、  
山雲釀雨去還來、

甲戌五月宿萬翠樓偶見亡友容堂先生詩幅有感

微風細雨宿溪邊、屈指曾遊已六年、壁上偶見亡友句、  
一吟不了淚潸然、

越函嶺

經過記道行最難、竹輿今日夢魂安、白茅滿地花如雪、

一路秋風鳥語寒

甲東大久保公もまた箱根の愛者であつた事は木戸公に譲らなかつた。併  
し今不幸にも其吟詠を得るの便を得ないので、僅に左の一絶を擧ぐるに



止めて置かう。

函根入浴中偶作

迂生未有尺寸功 叩辱朝恩禁闕中 早晚尋賢成夙志

深山何處訪英雄

維新前後に於ける愛國の志士、干戈落々の間に又此地を訪ふて無限の思を吟詠に顯はしたるもの藻人墨客のそれ等と相參差して、また箱根を飾るの金玉となつて居るものが多い。今其二三を掲げんかな。

晚過函嶺望西北五峯時凍雨新晴濕雲歸山色如墨

染濃澹墨層神變萬狀駭心動目得二絕句錄一

佐久間象山

五峯出沒晚雲間 澹墨層々勢欲奔 若使虎兒逢此景

當年不必畫桃村

過函嶺

賴三樹

當年意氣欲凌雲 快馬東馳不見山 今日危途春雪冷

檻車搖夢過函關

贈金泉樓主人

山内容堂

布草鞋行踏雲 朝來幾里度嶙岫 豫期今夕溫泉浴

洗得人間舊染塵

遊函山溫泉雜詩

大槻磐溪

幽艸閑花粧點溪 危樓下瞰野雲低 山中曆日無春夏

杜宇倉庚相喚啼

宮の下行幸の打ふし御題避暑をよめる三條實美

はかりて暑もよそによきぬらん君がいてゆの心すし

宮の下にて

同

いてゆにと都の人のつとひ來は箱根の奥も開けゆくらん  
我君のたまふ暇のみめぐみに暑忘れて暮すこの比

甲申秋日書於蘆湯客舍 同

茅檐外、忽聞犬吠鷄鳴、恍如雲中世界

竹牕下、唯有蟬吟鴉噪、方知靜裏乾坤

重陽過函嶺 久坂玄瑞

瞻望休吟岬岫詩、家山墳樹定凄其、重陽偶度函關路

寒雨秋風令我悲、

蘆湖 松平春嶽

玉櫛笥箱根の海を見渡せばふしをうつせる鏡なりけり

遊函根温泉雜詩 大沼枕山

新路分明竹樹間、畫樓壹壯壓青山、光陰遮莫早川早

好占浴遊連日間

函嶺雜詩

小野湖山

賜浴温泉楊太真、華清恩幸古無倫、山中婦女何天福

坐占唐宮第一春、

萬翠樓上即事

成島柳北

投宿即吾廬、優游意自舒、秋峯誇老勁、古澗愛清虛

吞月雲如獸、弄泉客似魚、夜來無一事、讀盡囊中書

箱根にて

同

さかみのや箱根の志のを征矢にはきていにし昔を思ふけふ哉

底倉の里にて

福羽美靜

深みとりまける青葉の底倉にすしき風はうちあこりつゝ

避暑辭

從四位 福羽美靜

紀元二千五百三十三年明治第六癸酉八月わか 天皇足柄縣相模國函嶺なる宮の下の温泉に 皇后宮もろとも行幸まし／＼けりこの時題を出して供奉の官人また其地方の輩の詩歌をめて御覽あらんとす 美靜從車して行宮に候し詠する所を奉りぬ又其 御題避暑のころを辭文二篇となして併せて奉らんとす凡天下の事人に人の才藝あり物に物の用能あり其あまりあるは足らざるを助けてもつて其道を盡す故に高位上にありて人を愛し物を使いし衆庶下にありて才をみかき用をはげむこれぞ人世の經營とすこの函嶺の山澗たるや道路険にして人家まれに市にあらず巷にあらず水聲喧しく風籟怒るが如しまことの一邊鄙といふべししかれども其山谷の幽致ある市街の及ぶ所にあらず其風水の清涼なる比すべきところなきのみならず所々温泉を生じて其功用すてに世

にしらるこれを人に譬ふれば其才小ならず其用實に大なりといふべし  
それ人己にしるものにあふときは上なきよろこびとす物にありても又  
其理なかるべからず今この山間の一邊土其清涼幽致好用あるをしられ  
わか 天皇かくのごとく避暑の地となし給ふにあふこれまことにこの  
温泉の美目とやいはんこの山谷の幸福とやいはん心なき水石といへど  
も其色よろこび其聲樂しまざらんや抑亦わか 天皇も其才用を愛し用  
ゐたまひて其所を得せしめたまふことまことに天道に協はせたまふと  
や申侍らんあなかしこや

右第一篇

美靜一日閑を乞ひてこのはこねの山間に逍遙し湖水のほとりに到りぬ  
道路草深うして何のちもふさもあらずれども只風聲の絶ゆることなき  
と涼氣のちのつからなるとは實に夏日の夏日たることをわするくに足

りぬまたこのときすでに八月なるをなほ驚ほととぎすの聲所々にきこえまたは千草の花ともはや匂ひ出たり湖には富士峯雪を帯して水上にうつりぬこれ等の景はのふることを得ざるが如し函嶺の街亭又所々の温泉をみるに涼を追て來寓する客おほしみな炎熱の候をいとひ身を清涼の地にうつし健康をとらんとするものなるべし凡天地間に氣をうけ生を得たるもの各其身を愛育し其體を養護せざるはなし中に就きて人は萬物の長として其智萬物に卓越し其理を窮め其道を盡す故に冬は煖室に入りて身をあたため夏は冷境を追て暑氣を避く其なすこと其道を得たりといふべしある人曰其身體を養ふのみを以て道にかなふとして可ならんやと予曰人何ぞ身體のみを養ふを可なりとせん其愛養すべきの極は心志なりけり良友を得て心をみかき善道をさきて志を大にし其業を勵まずんば人たるの甲斐あらんや方今天下舊習の拘束を脱しおの

この人の人たる其本分を盡し其身をして自らこれをつかふの時いたれりあはれこの椽室に入り涼地を追ふの心をあして各其心志を愛養開明せば實に萬物の長たる所行といふべからん聊事理を叙して興なきに似たれども水聲涼風いたる所の函嶺行宮の候所においてしるす

## 右第二篇

若し夫れ近代世界の大偉人として、昔に政治の上に其天成の大才を振つたばかりでなく、風流韻事に交ゆるに摘花折柳を以てして花々しき一代を飾りたる春畝伊藤公を箱根の愛者の中から脱することは出来な

## 爲萬翠樓主人

山翠重々匝小樓、風光此地最清幽、一泓碧玉靈泉水、洗得胸中萬斛愁



箱根湯本温泉  
 石泉樓  
 小川旅館  
 電話湯本十八番

相州湯本  
 物産問屋  
 田中商店

電話湯本二三番  
 振替口座東京四六三三番

大賣捌所

- 東京市神田區表神保町 東京堂書店
- 東京市神田區裏神保町 上田屋書店
- 東京市京橋區尾張町二丁目 東海堂書店
- 東京市日本橋區吳服町 北隆館書店
- 東京市京橋區鎗屋町 良明堂書店
- 相州小田原町幸町二丁目 平井積善堂
- 相州箱根湯本温泉 阿波屋商店
- 相州箱根宮の下温泉 柏屋商店

◀ 編修總裁大隈伯爵閣下 ▶

# 日本大辭典

▲正價

金六拾五圓

▲郵送料

第三卷特價七圓

▲送金方法

▲送本

首金額により尙遺學費に發送可申上候

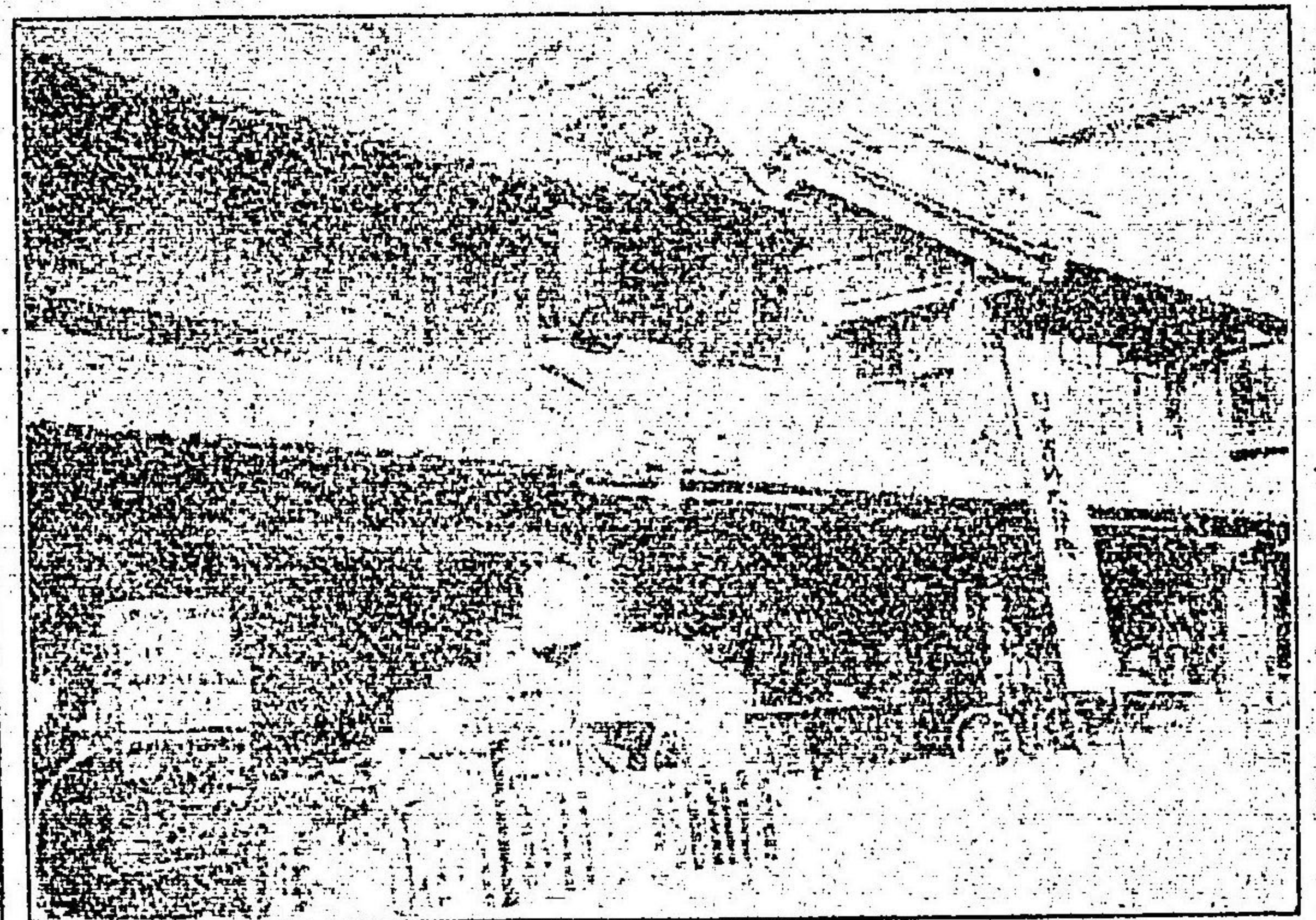
日本百科大辭典第三卷發行  
 新編の學說と特種の研究の事項とを網羅し、精確な美觀の缺漏なからんことを期し、三月廿四日、以て發行し、三萬部限り、特賣法を以て、從來坊間に行はれたる、廉價なると異なり、一巻刊行毎に、最低の法と、以て、既成品を、提供する、内容、實に、至便なる方法也。本書が、内容、實に、至便なる方法也。とは、第一、二卷、發行に、際し、豫定部數に超越せる、事實に、徴して、明かなり。本書は、官公衛學校、會社、圖書館、社寺、集會所等に、於ける、必備品、なり。政治家、教育家、學者、實業家、宗教家等の、大智、養たる、は、勿論、有ら、ゆる、家庭、如何なる、人士、にも、不可、缺の、寶典、たる、眞價有する、とは、噴々の、世評、と、購買者、の、多、方面、なる、こと、により、て、證明、し、得、べし。

東京 三省堂書店 振替東京 五九七

▼時代の要求に適切なる優良圖書を出版す

- 小中學校用教科圖書
- 各種辭書類
- 地圖及掛圖類
- 英文書讀刻
- 參考用圖書
- 内外出版圖書取次

機敏迅速に内外の新刊圖書を供給す



東京 東神 三省堂書店 電話 本局 七二九 一四七

JUVENILE ENGLISH LITERATURE

菅野德助先生 共譯  
奈倉次郎先生

青年英文學叢書

全部百册 每篇讀切  
定價一册十五錢 郵稅不要

- 第一篇…(金 色 王)…The Golden Touch.  
by Nathaniel Hawthorne.
- 第二篇…(船 乘 新 入)…Sinbad the Sailor.  
from Arabian Night.
- 第三篇…(三 人 姫)…The Three Beautiful Princesses.  
by Washington Irving.
- 第四篇…(ヴェニスの商人)…The Merchant of Venice.  
From Lamb's Tales from Shakespeare.
- 第五篇…(小九郎次大九郎次)…Little Klaus and Big Klaus.  
by Hans Andersen.
- 第六篇…(無人島日記)…The Journal of Robinson Crusoe.  
by Daniel Defoe.
- 第七篇…(出 世 册)…Poor Richard's Almanac.  
by Benjamin Franklin.
- 第八篇…(アーサー王物語)…King Arthur's Round Table.  
Selected and Adapted.
- 第九篇…(クリートの迷宮)…The Rabyrinth of Crete.  
by James Baldwin.
- 第十篇…(皇子ハムレット)…Hamlet, Prince of Denmark.  
from Lamb's Tales of Shakespeare.
- 第十一篇…(反 魂 鳥)…The Nightingale.  
by Hans Andersen.
- 第十二篇…(新世界浦島物語)…Rip Van Winkle.  
by Washington Irving.
- 第十三篇…(小人國旅行記)…Gulliver in Lilliput.  
by Dean Swift.
- 第十四篇…(少年嚮師傳記物語)…Biographical Stories.  
by Nathaniel Hawthorne.
- 第十五篇…(屋根裏の哲人)…An Attic Philosopher in Paris.  
by E. Souvestre.
- 第十六篇…(オセロ)…Othello.  
by Lamb's Tales from Shakespeare.
- 第十七篇…(綠 玉 冠)…The Adventure of the Beryl  
Coronet.  
by Conan Doyle.

二七局本話電  
九四七一六三三

店書堂省三 京東  
田神

版出念記年十三業創堂省三

日  
本  
地  
圖

世界地圖

全壹軸 索引一册附

縱五尺八寸  
橫五尺六寸

絹緞子織表裝 定價金八圓  
特價金三圓八十錢

絹緞子織表裝 折賣價金二圓五十錢

金箔表裝屏風 賣價金拾貳圓  
緞子表裝屏風 賣價金七圓

荷造費 掛軸金拾貳錢・屏風金壹圓貳拾錢  
送料實費とす。折圖送料金拾八錢

世  
界  
地  
圖

國民的必備品の提供

弊堂は創業三十年記念として客年末世界地圖を發表して江湖の好評を博し今又之と雙璧たるべき日本地圖を發刊して國民的必備品を提供せり抑々この兩地圖たるや多年の日子を費して斬新豊富なる材料によりて編成せるものなるが故に其の精確詳密なるは勿論印刷の鮮明表裝の優美他に類例なき最良圖たり去れば家庭學校會社官公衙に於て苟も國民として斯くの如き良圖を備ふるの必要あるは喋々を要せざるなり



修養に最も適  
したる趣味深  
き避暑の良友  
を紹介す

衆議院議員  
三土忠造先生著  
西史美談  
全一冊  
ホケツト形美本  
定價金貳拾錢  
郵稅金四錢

日本歴史地理學會編纂  
再版  
戰國時代史論  
全一冊  
クローヌス美裝  
定價金壹圓  
郵稅金八錢

日本  
歴史地理  
學會編纂  
鎌倉文庫  
論史明文  
全一冊  
定價金參拾錢  
郵稅金拾貳錢

小田内通教先生著  
趣味乃地理  
歐羅巴  
（前編）  
クワス美本  
定價金八拾五錢  
郵稅金八錢

綠蔭必讀の書  
として斯く清  
新なるもの他  
にありや

文藝學博士 南條文雄 共編  
文藝學博士 前田慈 師

（第八版）



（全一冊）  
上製定價金壹圓貳拾錢  
並製定價金六拾五錢  
郵稅各金八錢

松伯岡村愛藏先生譯註  
對照註釋  
ドイル探偵譚  
（全一冊）  
美本洋裝  
定價金四拾錢  
郵稅金四錢

振替口座東京  
一五九七

三省堂書店

東京 東神  
電話本局二七  
三六一〇・七一四九

發行所

文部編修 文學博士 喜田貞吉先生編述

# 國史之教育

詔書の所謂光輝ある國史の成跡及國民教育の精神は本書之を收め更に國定歴史教科書編纂の要旨を解明す破天荒の史籍也

全 紙數五百餘頁  
一 定價一圓五十錢  
冊 郵 稅 十二錢

史界の大偉觀

壹萬部限提供

學習院教授 文學士 大森金五郎先生編述

# 國史概論

確實に日本史の概念を得んとする者又は教員檢定試験に應ぜんとするには好個の参考書也問答亦時代順に配列して研究至便也

附錄 國史問答三百餘題 (索引附)

全 紙數六百餘頁  
一 美術插畫十餘枚  
冊 定價十二圓  
郵 稅 十六錢

東京神田區本町一丁目 三省堂書店 (七九五一東京座口替振)  
東京東區本町一丁目 六合館書店 (一七二東京座口替振)

## 最近調査本邦唯一の地名辭書出づ!!

●内務大臣 男爵 平田東助君題辭 ●自治館編輯局編纂  
●内務省地方局長 床次竹次郎君序文 ●四十三年三月現在

# 地方名鑑

本書は多くの日子と勞費を厭はず殊に正確詳密に各地方官公衙の調査を煩はして得たる材料を經てし最近の諸統計を緯として編成せるもの也  
●本書の内容が府縣郡市町村字小字及び町の丁目等迄も明かにし凡て傍訓を施して讀み易くしたるは勿論各町別戸口數及び現任役場位置等をも附記して更に利用の範圍を擴大せり  
●官公衙及び學校に於ける事務上最良の参考運送通信等に從事する者及び一般人士の必携書也

六號活字四段組	紙數約九百餘頁	紙製本約九百餘頁	定價上製金貳圓四拾錢
郵送料	不在	要	

發行所 神田今小路三十一番 自治館 ●特販賣所 神田區裏神保町一丁目 三省堂書店  
振替東京一八九八七

# 消夏の讀物

藤島 武二 著

敏にして眞の現實の燒點を十分に玩味し  
 やうに要するに有爲流轉の世の樂を有らん  
 限り深く多く享けたいと云ふのである。  
 美菊判箱入全二冊 正價金九拾錢 郵税金八錢

# 小説 渦中

上田 敏 著

生を樂まな生活くわんを豊富にしやう。  
 人生の渦卷うずまきに身を投じて其  
 激流げきりゅうに拔手を切つて泳がう。刹  
 那しやな刹那しやなの智覺ちかくを鋭く

東京日本橋大倉書店 電話本局四一八 電話本局二三八

京都帝國大學講師 藤井乙男氏編

# 諺語大辭典

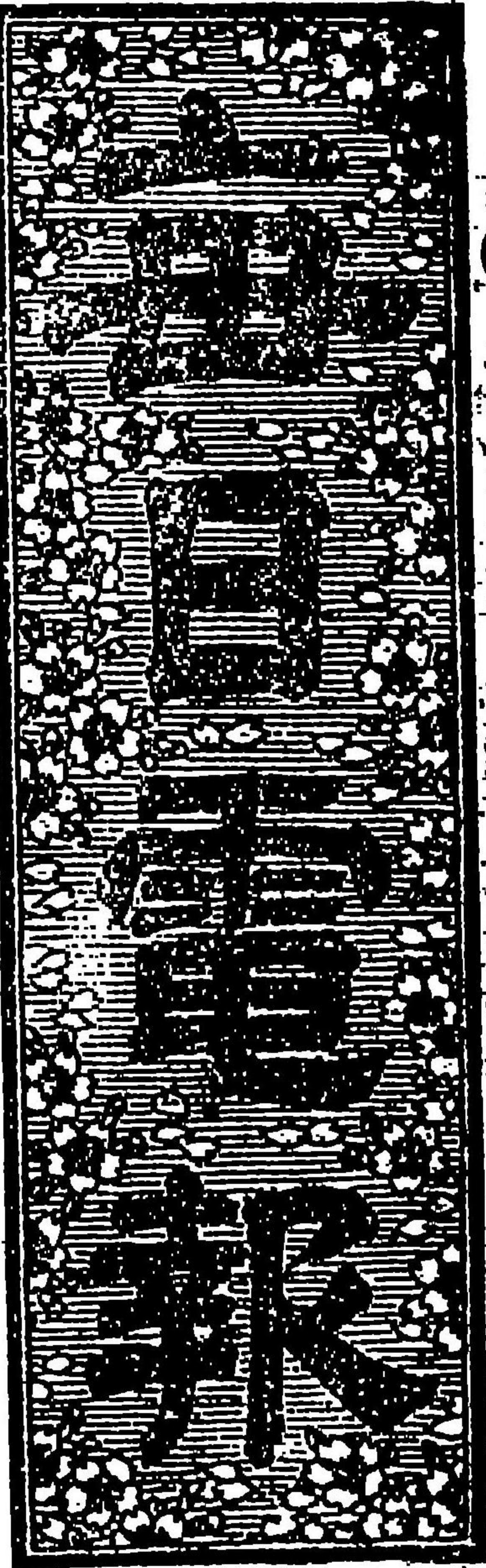
非常の歡迎、特價提供の貳萬部將に盡きんとす

有らゆる階級の人士が歎稱と感謝とを以て  
 歡迎しつゝある、徳富蘇峯氏の所謂「人生哲  
 學の智識を鐘めたる」我國空前の大諺語辭  
 典「語學文學の貴重なる研究資料として、  
 我國民性の忠實なる反射鏡として、實際的  
 なる修身齊家の經典として、聰明なる萬民  
 の教導者として、天下無比の寶典也。

- 一 製本體裁 菊版背皮角皮製 紙數壹千四百頁 横七寸 五寸六分
- 一定 價 金四圓五拾錢
- 一 特價部數 貳萬部限り
- 一 特價 金參圓五拾錢 (並製ケイブル付 脊空押金文字入 特製天金脊模入)
- 一 小包送料 内地金四十六錢 外埠金五十一錢
- 一 內容見本 往復端書ニテ 御申込ノ事

發行所 東京市神田區日工一町 有朋書堂 電話本局一三一六 電話本局一七四八

●●大阪毎日新聞分身●●



THE STUDENTS  
ENGLISH COMPANION.

▲英文欄の特長▲

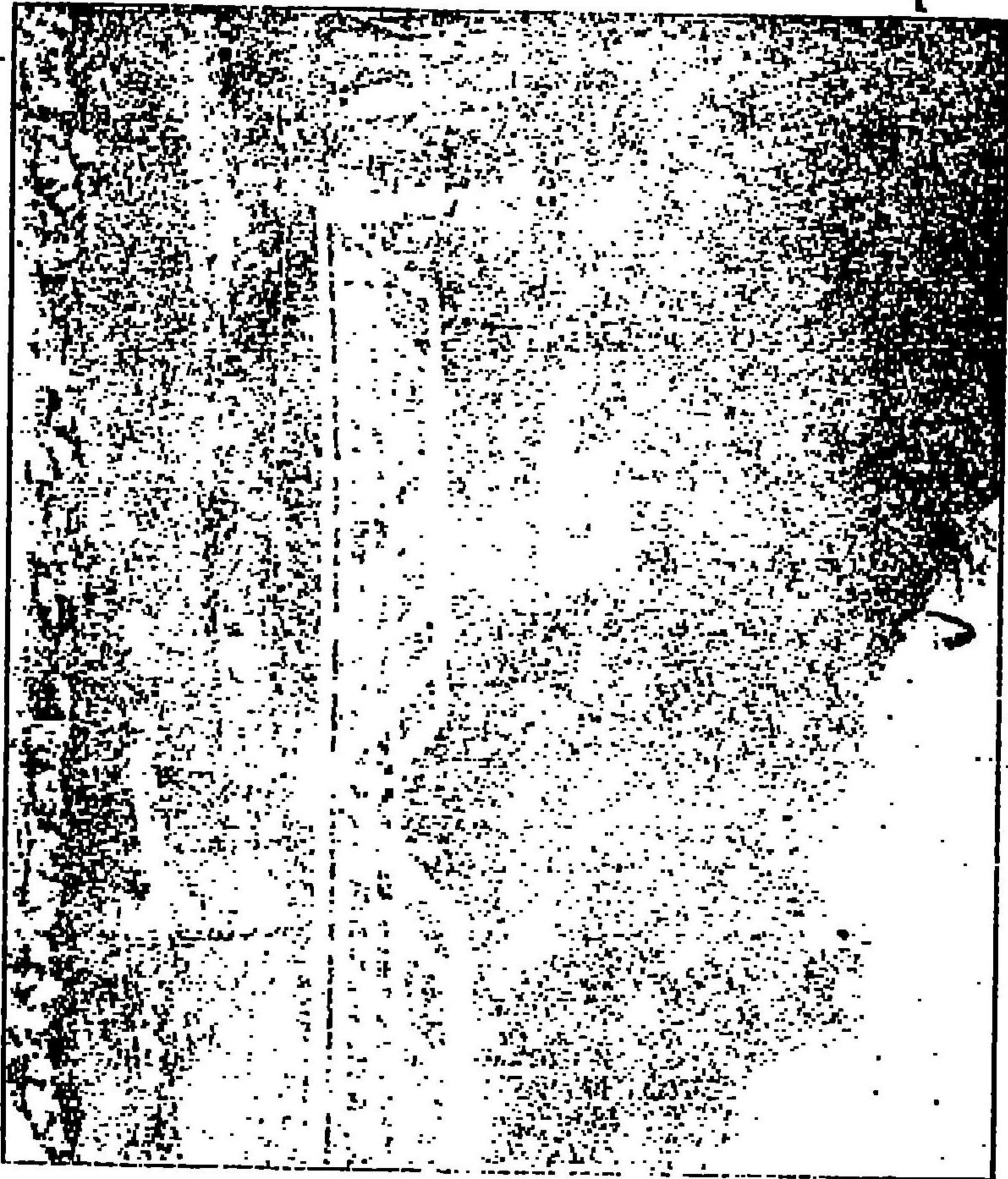
▲毎日電報の英文欄は專門大家の起草に成り実法用語の正確なる既に日本一の稱あり  
▲毎日電報の英文欄には短評あり雑報あり又時に試験問題の和文英譯を載せ、各學生は必驗英語研究者の指針たり  
▲故に毎日電報を讀めば以て内外語彙の積立を善にするのみならず併て英語了解の捷徑として學生の好伴たり

▲お伽噺募集 (第一回は七月三日の紙上に發表したり日下第二回募集中)

發行所 東京市丸の内 毎日電報社 振替貯金 五八四二番

◎郵送料共三ヶ月……………前金一圓

留學園温泉湯本温泉  
温泉樓 宿舎 電話湯本取番



號時臨理地史歴 根

補 8M-16

# ルービンキ

英國アトウォーター博士

●世界中最も簡單にして滋養ある食物を何と問ふ人あらば我はパン、バター及ビールに如くものなしと答へん  
而して此所説に恰當する醇良なる麥酒は實に我が

キリンビールなり

●山間を跋渉し名所古蹟を訪問する紳士諸君  
キリンビールを一掬せば精神に一種云ふへからざる爽快を覺ゆるに至らん

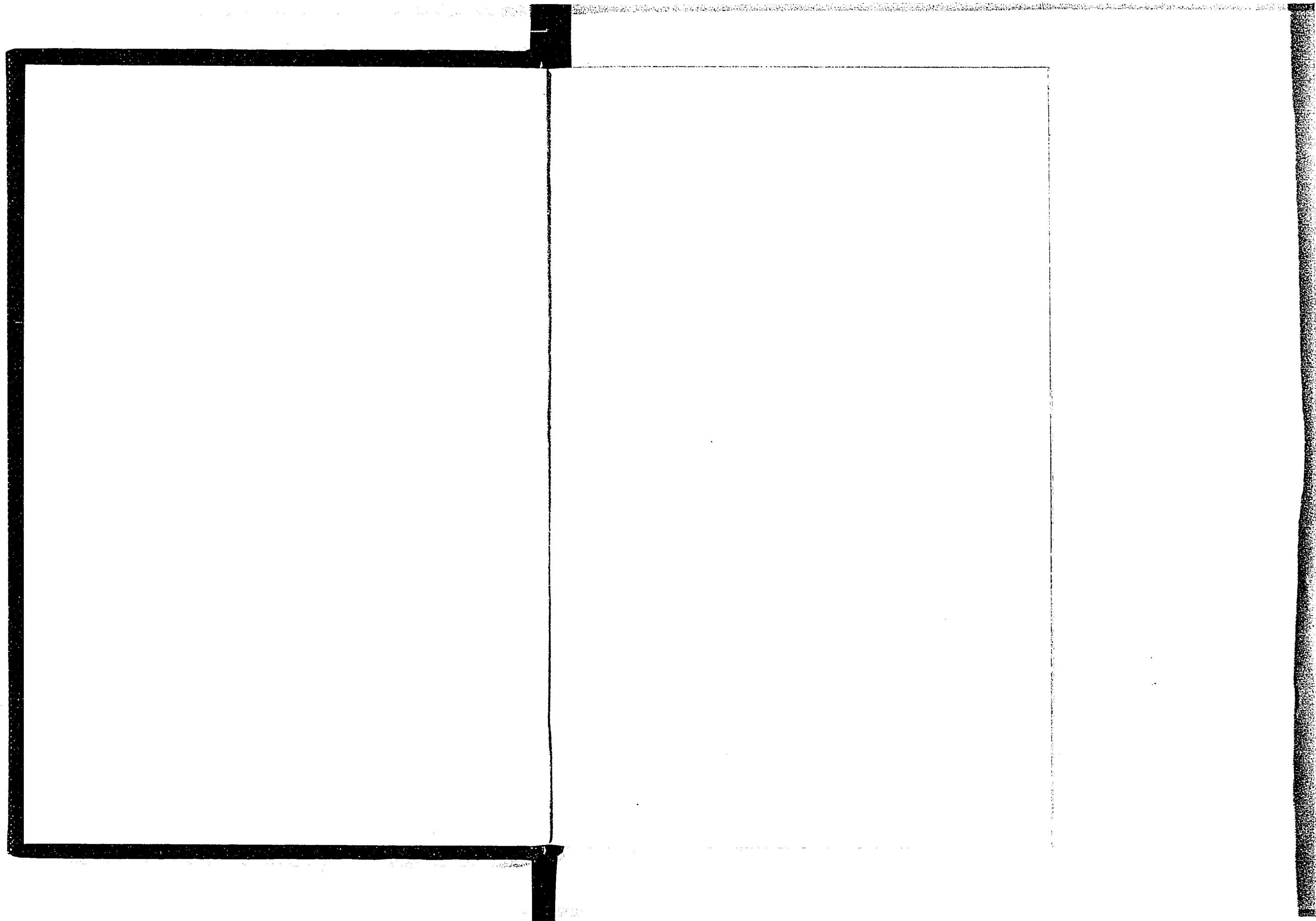
## Kirin Beer

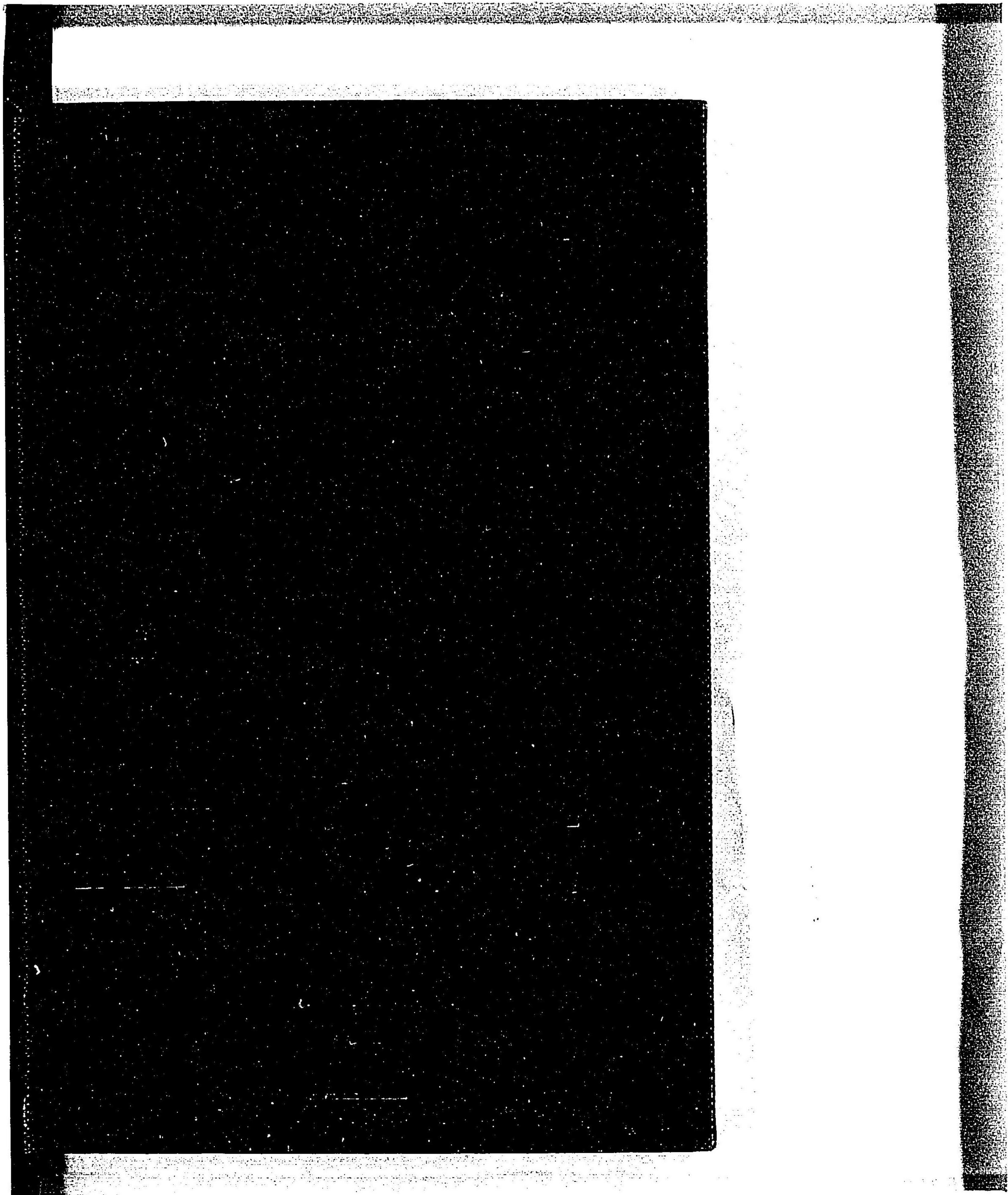
店約特 元賣發

門衛左徳井今 町原田小州相

郎五房島井 根箱州相

屋治明 會合名





29137  
N687h

024265-000-0

291.37-N687h

箱根

岡部 精一 / 編

M43

ADC-1434

